

# 海と希望の学校

腹が減っては戦ができぬという。

四半世紀以上前、赤道付近を中心に生息するウナギ全種類の採集に挑んだ。環境問題や生物多様性が注目される現在では言語道断だが、かつては調査許可どころか人脈も土地勘もない熱帯の片田舎に降り立ち、ビーチサンダルを鳴らして熱風の中へ踏み出すのが常だった。若さゆえの無知、無謀および無計画は必然的に飢えや乾きに結びつき、当然の帰結としてメリメリと心の折れる音を聞くのである。

灼熱の炎天下、ウナギを求めて彷徨ったアフリカ・マラウイ湖畔では、持参した水を飲み尽くした末、猛烈な吐き気と頭痛に襲われて道端に倒れ込んだ。インドネシアの宗教戒律の厳しい村で断食月（ラマダン）に行き当たり、食事の作法がわからず一人絶食状態となって身動きもままならなくなつた。そんな時、まず手に入れるべきは水や食べ物となるのは、生物として当然の反応だろう。しかしここで、たっぷり飲食にありついたらとしても、再び目的に向かって立ち上がることは容易ではない。ゴールへ続く苦難の道を想像すると、いつそウナギなど放り出し、いつまでも安宿の

ベッドに貼り付いていたくなるのである。一度折れた心は、そう簡単には立て直せない。

そんな時、文庫本や音楽プレーヤーを取り出し、名前しか知らぬ作者の世界に心を委ねると、体中に力がみなぎり、再び「ウナギウナギ！」と叫んで熱風の中へ走り出すことができるようになる。よい小説や音楽に触れたとき、心の底からムクムクと湧き上がるあの不思議な力といえば、どなたも思い当たるに違いない。腹だけでなく心も満たされなければ戦はできないのだと思う。ただよく考えてみれば、小説は単なる文字、音楽は音の集合体に過ぎない。その一つ一つは、いわば無味無臭の「部品」であり、到底人に力など与えるべくもない。要は部品の選択と組み合わせこそ、造り手の心技の妙なのだろう。

2014年。大槌町にある研究センターに着任した。震災から3年、そこには泥と瓦礫の中から懸命に立ち上がろうとする地域社会とそれを支える人々の姿があった。新しい町作り、漁業復興、産業再生……。まずは未曾有の大災害に立ち向かう不安を打ち消すように、実践的かつ具体的な経済効



東京大学大気海洋研究所  
国際沿岸海洋研究センター  
センター長

青山 潤

果、すなわち「腹」を満たすことを掲げた支援が求められていたように思う。上質な海産物に恵まれた三陸では、ウナギなど腹の足しになるはずがない。加えて、社会の役に立たぬことこそ自然科学者の矜持とばかりに研究をすすめてきた私に、実践的なゴールなど提示できるはずもなかった。無残に失われた人命や財産、思い出の強烈な痕跡を目の当たりにするにつけ、己の無力さを痛感するばかりだった。

震災から10年以上が経過し、復興は一段落したようにも見える。しかし、被災地には未だ多くの課題が残されている。加えて、基幹産業である漁業の不振や人口減少の加速、自然災害や感染症拡大など新たな問題も顕在化している。残念ながら、三陸の腹を満たすことについて、私がほぼ無能であることに変わりはない。しかし、かつて無味無臭の文字や音に与えられた力を思えば、何かできると思うようになった。役にも立たぬ無味無臭の研究成果を、いかに組み合わせる地域の人たちと共に関「海と希望の学校」という名の活動に取り組んでいる。